

学位論文題名

古辞書における漢字の字体注記と処理手段

学位論文内容の要旨

第1章・第2章は、古辞書の字体注記の分析を目的としている。

第1章「『篆隸万象名義』・『大広益会玉篇』における原本系『玉篇』の字体注記の受容」においては、『玉篇』系字書の字体注記に着目し、字体注記を抜き出して相互比較を行った。その結果、まず、『大広益会玉篇』の字体注記には、原本系『玉篇』の注記を継承するものが多いことが明らかとなった。これは、『大広益会玉篇』の「反切」が大きく書き換えられているのとは異なる現象である。また、『大広益会玉篇』の「籀文」注記の漢字を『篆隸万象名義』と比較することで、『篆隸万象名義』の五帖以外の帖においては「籀文」注記が「同」系統の注記に変化していることが明らかとなり、「籀文」注記の受容の姿勢を推測できる結果となった。

第2章「『大広益会玉篇』・『大宋重修広韻』の字体注記について」では、『大広益会玉篇』・『大宋重修広韻』の字体注記の全体的な概観を明らかにした上で、両辞書に共通する文字を考察の対象として、字体注記がどの程度共通しているかについて明らかにした。第1章では、『玉篇』系の辞書に考察対象が限定されていたが、本章では、『切韻』系韻書の字体注記にも考察を広げることとなった。全体を概観した結果、『大宋重修広韻』には、『大広益会玉篇』と較べて「俗」系統の字体注記が多いことなどが明らかになり、また、両書を比較した結果、共通する文字の主要な字体注記の規範には、大きな異なりがないことが明らかとなった。

第3章・第4章では、古辞書の漢字を、電子テキスト上で表現してゆく問題について論じた。第3章は、沢存堂本『大宋重修広韻』のデータベースの設計の手段について論じたものである。『大漢和辞典』をコードブックとしてデータベースを設計することについて、その問題点や解決策について論じ、データベース化を実践した。設計したデータベースについては、インターネットによって公開する。本章は、データベースと対となるべき規格書の実践である。

第4章は、第3章のデータベースの設計において行った文字同定の包摂規準を、JIS X0208:1997 所収字に限定して、より精密な形で具体的に例示するものである。この章の段階によって、宋版と現代漢字字体との包摂規準について、多くの規準の例示の達成が得られた。

また、本論には、以下の資料が付属している。

『大広益会玉篇』字体注記索引

『大宋重修広韻』字体注記索引

沢存堂本『大宋重修広韻』所収のJIS漢字一覧表

『大宋重修広韻』データベース

資料「『大広益会玉篇』字体注記索引」および「『大宋重修広韻』字体注記索引」は、第二冊「資料篇一」に収録した。第1章・第2章に関連して、『大広益会玉篇』・『大宋重修広韻』の全

字体注記をひきあててを目的とした索引である。

資料「沢存堂本『大宋重修広韻』所収の JIS 漢字一覧表」は、第 4 章に関連して、『大宋重修広韻』所収の JIS X0208:1997 所収字を全て一覧として示したものである。沢存堂本『大宋重修広韻』と JIS X0208:1997 の字形双方を示し、また、同定に用いた包摂規準も合わせて示し、具体的にどのように同定を行ったかを明示している。

資料『大宋重修広韻』データベース」は、第 3 章において設計手段を示したデータベースを、そのままインターネット上に公開したものである。まだ改善すべき点は多いと思うが、本論に添付する便宜もあり、公開している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 石 塚 晴 通

副 査 教 授 宮 澤 俊 雅

副 査 助 教 授 池 田 証 壽

学 位 論 文 題 名

古辞書における漢字の字体注記と処理手段

本論文は、原本系『玉篇』・『篆隸万象名義』・『大広益会玉篇』・『大宋重修広韻』等の古辞書に於ける字体注記に注目して、その相互関連・受容の実態を実証的に解明し、また、『大宋重修広韻』をデータベース化し、JIS 漢字との文字同定を行ったものである。

第1章及び第2章の字体注記の部分は、『大広益会玉篇』の「反切」が原本系『玉篇』のそれを大きく書き換えたものとなっているのとは異って、『大広益会玉篇』の字体注記は原本系『玉篇』の注記を継承したものが多くあることを実証し、また『大宋重修広韻』と『大広益会玉篇』との字体注記を全面比較して両者の規範には大きな異りがないことを実証して、専門分野の全国学会に於いて研究発表し、高い評価を得てその論文が機関誌に掲載されている。

第3章及び第4章は、学界の基本資料である沢存堂本『大宋重修広韻』を『大漢和辞典』をコードブックとしてデータベースを作成し、文字同定の包摂規準を JIS X 0208 に依拠して具体的に例示したものであり、将来の研究の進展を見込んで作成したデータベースであり、基礎的労作として評価し得るものである。

付属資料類も学界共有の工具書として有用なものである。

以上より、当委員会は、全員一致して、本論文を博士（文学）の学位授与に相応しいものと認定する。